

車椅子体験学習による学習効果の検討

松浦 治代・宮脇美保子

Haruyo MATSUURA and Mihoko MIYAWAKI

Achievement of the student nurse practice through the experimental ride on wheelchair

車椅子は歩行が困難な障害者や体力低下のある人の移動手段として、医療・福祉施設内だけでなく日常的に用いられている。本学では、従来基礎看護科目において車椅子による移送技術の習得を目的に学内演習を行ってきた。しかし、学内演習だけでは物理的、空間的な制限があり、移動できる範囲が限定されているため、車椅子の操作技術の習得のみにとどまり、「安全・安楽に移送できる」という演習目標を十分に達成することは困難な状況であった。

そこで、車椅子に乗る人にとっての「安全・安楽」とは何かについて考えることを目的として、学外における体験学習を試みたところ、高い学習効果が得られた。

本稿では、学生が体験を通して、車椅子で移動する患者や障害者にとっての「安全・安楽」とは何か、を踏まえたいうでの看護者の役割について、提出したレポートの内容を検討したので報告する。

体験学習の概要

体験学習をしたのは、本学看護学科1年生78名で、時期は平成8年11月の約1ヵ月間である。学生は3名程度のチームを組み、車椅子に乗る人、援助者、観察者、それぞれの役割りを1回ずつ体験した。使用した車椅子は「成人標準型」である。

また、学生は学外に出る前に、車椅子の取扱い方法について教官から説明を受け、あらかじめ学内で操作を練習した。学外での体験コースや時間については学生が計画し、終了後体験学習レポートを提出した。

学生が車椅子で移動した範囲は、本学を中心に半径約1.3km以内で、所要時間は2、3時間程度であった。

結果および考察

ここでは「車椅子に乗った」体験にもとづいて、看護学科

「安全・安楽」に移動できたか否かについて、ハードとソフトの面から検討した(表1)。

1. 「安全・安楽」の視点からみたハード(道路、施設・設備)についての検討

1) 道路における車椅子への配慮

ほとんどの学生が、車椅子に乗って体験した振動の強さを「想像以上」であったと述べていた。歩行している時には、気にもとめていなかった何気ない道路上の段差や傾斜、凸凹、小石等が車椅子で移動しようとするすると障害となり、転倒の危険性さえも感じていた。また、歩行時には便利しか気付かなかった点字ブロックや、綺麗だと思っていたタイル張りの歩道などが、車椅子での移動にはマイナスの影響をもたらしたとしていた。この他、車椅子に乗っている側からすると、注目視点が低くなり目の高さが自動車を捉えやすくなったためか、自動車の走行をかなり脅威に感じ、「自分たちの存在に気付いてくれているか」気になったようである。

また、体験した時期が初冬の季節で、夕方4時以降に集中していたこともあり、暮れていくにつれ車椅子が夜間使用には適さないことを実感していた。これは車椅子には自転車のようなライトや反射板が装備されていないためであり、非常に危険である。学生は、車椅子でも夜間外出できるような安全面に関する配慮の必要性を強調していた。

このように、ハードとしての道路は車椅子に乗る人にとって安全・安楽の両面ともに問題が多いと感じていた。

2) 施設・設備における車椅子への配慮

今回、学生が体験したコースは、日頃自分たちがよく利用している施設を含むものであり、歩行時との比較が容易なものであった。実際にはデパート、スーパー、

コンビニエンスストア、市役所、郵便局、駅、図書館等であった。それぞれの場所で買い物、飲食、現金の引き出し等を試みていた。その中で特に障害となったのは出入り口の階段、狭い通路、ドア、陳列してある商品棚の高さなどであった。なかでも、出入り口に自転車や標識などが置いてあると、それが障害となり、施設内にさえ入れない状況であったようである。

また、施設内、街頭に、障害者用のトイレ、電話ボックス等が設置してあったが、その数は少なかった。このように、全体的には施設・設備は車椅子利用者にとって厳しいものであると評価していた。

以上、学生が体験を通して指摘したハードの不備については、実際に車椅子で生活している人の報告¹⁾と、ほぼ一致していた。個々の設備については徐々に改善されてきているが、これまでのハード面での設計には高齢者や障害者への安全・安楽面での配慮があまりなされていない。福祉の街づくりへの課題として、杉

山²⁾がいうように、これからは障害者の視点に立った街づくりの改善が望まれる。

2. 「安全・安楽」の視点からみたソフト面（他者の視線・声かけ）についての検討（表2）。

まず、他者の視線について述べる。ほとんどの学生が車椅子に乗っているときに感じた他者の視線について「じろじろ見られた」、「わざと視線をそらせた」等と表現していた。そして、どちらの場合も自分の存在が他者にとって「哀れみ」、「同情」、「好奇心」の対象として受け取られた結果だと解釈していた。

この解釈には、学生自身が「いつもと違う自分」を強く意識していたことも影響していると考えられる。学生は、こうした自分に向けられた視線に対して「孤独」、「怒り」、「屈辱」といった感情をもったと述べていた。

しかし、このような体験を通して、体験前の自分も

表1. 「安全・安楽」の視点から見たハード（道路、施設・設備等）面の問題

	工夫されている点	
道路事情	問題点	道路 想像以上の振動 凸凹が多い（アスファルト、点字ブロック、マンホール、タイル張りの歩道） 段差が上れない（歩道と車道の間） 転倒の危険性（段差、小石） 道路は中央が高いためまっすぐに進めない 幅が狭い（歩道、一般道） 緩斜面でも急に感じる、怖い 信号がすぐ変わるため焦る、不安になる 視線が低いいため、石、段差が目について怖い
		自動車 視線が低いため自動車が目の前を走ると怖い 低いため車椅子は運転手から死角になる
施設・設備事情	工夫されている点	路上の障害物（自動車、自転車、電信柱、ゴミ）
	問題点	公園（途中に水平部分のある坂道、傾斜に注意を促す表示） スロープの設置 電話の高さ トイレ（扉、広さ、センサー付き照明、ボタン類の位置、緊急用ボタン、手すり、角度の付いた鏡、手洗いの高さ） エレベータ（開閉の時間、ボタンの位置、広さ） カウンターの高さ（62センチ車椅子で届く高さ） 引き戸でないドア 電話ボックス（扉の開閉、広さ、電話機の高さ） エレベータ（早く閉まってしまう、狭い） 建物に入れない（入口が狭い、階段がある） トイレ（一般用には入れない、障害者用は数が少ない、男女の区別がない、暗くて入りにくい） 郵便局・銀行（カウンターが高く届かない、ATMの高さ） デパート・スーパー・コンビニエンスストア （狭い売り場に入れない、棚の上の物は見えない、カートが押せない、かごが持てない） 自動販売機（高いところにあるボタンは押せない・道の縁にあり、車椅子が不安定） 形だけのスロープ（急すぎる） 障害物（配慮のない標識）

表2. 「安全・安楽」の視点から見たソフト（他者の視線・声かけ）面の問題

肯定	親切（笑顔で順番、道を譲ってくれる） 優しく話しかけてくれる（「頑張ってるね」、うれしく思う） 気を使って対応してくれる（違うレジでも受けてくれた）
否定	人の目が気になる、視線を感じる。恥ずかしい （じろじろ見る、わざと目をそらす、振り返ってまで見る、顔を見てから足を見る） 特別な人として扱われる、変に気を使われる（店員の挨拶、対応がいつもより親切） いきどおり （「悪いのは足だけなのに、普通の人間なのに」という思い、自分ではなく、介助者を主に話しかける、話しが通じないと思われている） 援助者が見えないため心細さ、孤独を感じる （車椅子は簡単に振り向くことが出来ない、声が聞こえにくい、目を見て話せない） 申し訳ない（通行・買い物等で他人の邪魔をしている） 援助者に対して気を使う（介助者の疲労、負担を感じる） 人に協力を求めなければならない屈辱 障害者に対する配慮がない（自動車・自転車が知らん顔して通る） 威圧感を感じる、すべての物が大きく見える（自動車、自転車が怖い）

表3. 車椅子に乗った体験から援助者に望むこと

操作技術	段差のあるところではティッピングレバーを活用してほしい 凸凹はゆっくり通ってほしい 何かするたびにブレーキをかけてほしい 良い道を選択してほしい 段差は蛇行しながら、あるいは援助者が下になって降りてほしい 声をかけるときは大きめの声で、耳もとで話してほしい
乗っている人への配慮	行動が予測できるような声かけをしてほしい 時々顔を見せてほしい 乗る人の状況（疲労、身体状況等）をわかってほしい 不安になる発言（「どうするんだっけ」等）はやめてほしい 負担に感じる発言（「よいしょ」等）はやめてほしい 無理はしないでほしい（時間、距離） （乗る人の）身だしなみに配慮してほしい

また車椅子に乗っている人に「同情的」な視線を向けていたことに気付いたと、自己を振り返ることもできていた。

次に、他者からの声かけについての学生の反応について述べる。声かけに対する学生の反応は「自分に関心を示してくれた」、「親切にしてくれた」と素直に嬉しさや感謝等の肯定的感情をもった者と、「変に気を使われて嫌だ」、「普通に接してほしい」などの否定的な感情を抱いた者に分かれた。

肯定的に受けとめた学生は、車椅子に乗って体験した「心細い」気持ちに親切な声かけが暖かく響いていた。一方、否定的に解釈した学生は自分は「足」が悪いだけで、理解力、判断力等の他の能力には無関係であるのに特別扱いされていると感じ、不快感をもったものと思われる。このような感情は、梶原³⁾がいうように、他者からの視線や声かけを通して、他者が見ているだろう自分の姿を想像した結果として生じたものである。

学生のなかには、車椅子に乗った自分を「小さく感

じた」とボディイメージが変容したり、「なにもできないような気がした」等と無力感をもった者もいた。このように学生は、車椅子に乗ることには、単に身体を空間上で移動させること以上の意味があることを実感していた。

学生は、今回の「車椅子に乗る」体験から患者や障害者の心理について、十分とはいえないまでも、ある程度理解することにつながったと評価していた。

体験学習効果の検討

実際に学外で体験学習をした効果として、以下のことがあげられる。

1. 現実の生活環境が「車椅子に乗る人」にとって「安全・安楽」なものではないことを理解したうえで、それらの解決策を考えることができていた（表3）。

例えば、車椅子操作時の振動を少しでも軽減させるためにはゆっくり移動する。小さな段差でも知らない振動を強く感じることもあるので、小さいことでも前もって声かけをすることの重要性をあげる者があ

た。また、危険予告を目的とした声かけだけでなく、孤独感等に対しても声かけは重要であるとする者も多かった。

学内演習では、臨場感を出すにも限界があり、学生が解決策をあげるところまでは到達しにくい。しかし、今回の演習では自己体験をもとに、どうすれば安全に安楽に移動できるかという観点で、具体的な解決策を考えることができていた。

2.他者（学生以外）の反応を知ることができた。

一般の人は学生を「体験学習している学生」としてではなく「障害者」として捉え、対応していた。人は、他者との関わりの中で自分がおかれている立場や位置を認識するものである。しかし、学内で実施するロールプレイングだけでは、学生は、客観的に観察するというよりも同じ学習者として評価してしまう傾向がみられる。今回、一般の人達の率直な視線にさらされたことで「見られる」ことを実感できた。「見る側」から「見られる側」に立場を変えることで、見えてくるものが大きく変化することも学習できていた。

3.自分で体験するコース、時間を計画することができた。指示されたことを受動的に実施するよりも、自ら計画することで、より主体的に学習することができていた。

体験学習の限界と課題

今回の学習体験では、初心者として「援助を受ける」側の体験にとどまっており、「車椅子に乗る」ことに熟練している人がどのような援助を必要としているか、といった点については考察が及ばなかった。その原因

としては、実際に車椅子を利用して生活している人との接触がなかったこと、体験したのが1年生であり専門的知識が少ないこと等により、車椅子を利用する熟練者の生活をイメージしにくかったことが考えられる。

今回の結果を踏まえ、車椅子を利用する初心者や熟練者が、それぞれどのような援助を必要としているのか、具体的に考えることができるような教育内容および方法の検討を行っていく必要があると考えられる。

要 約

車椅子に乗る体験学習からの学びについて、本学看護学科1年生78名のレポート内容を検討した。学生は本学を中心に2、3時間かけて、半径約1.3kmの範囲内で、デパート、銀行、図書館など様々な施設を利用し、道路を歩いて車椅子に乗る体験をしていた。その結果、安全・安楽について、道路、施設・設備などハードに関する問題と、他者の視線、態度など心理面に及ぼすソフトの問題に分類され、考察されていた。学生は、車椅子での生活を余儀なくされた人の物理的・心理的な問題に気付くことができた。さらに、今回の体験をもとに、車椅子利用者に対する援助のあり方についても検討できていた。

文 献

- 1) 村田稔, 車椅子から見た街, 第1版, 岩波, 1994.
- 2) 杉山彰, 総合リハビリテーション, 23, 99-104, 1995.
- 3) 梶原佳子, 現代のエスプリ, 307, 63-71, 1993.

Summary

Seventy-eight student nurses experienced riding of wheelchair to do usual living performance.

The students reports referred to their impression about safety and comfort for the trails at two points of view, hardware such as street road, facilities, equipment and so on, and software such as public behavior, attraction of public gaze, attitude for the trails and so on.

Students picked up many problems to be solved through trying wheelchair ride, realizing what kind of physical and mental problems person, obliged to wheelchair life, have been holding and considering how nurses should care the wheelchair riders on their sides.